

書評

分子細胞生物学（第2版） ▶ 多賀谷光男 著

分子細胞生物学（第2版）／多賀谷光男 著／朝倉書店
2016／B5判 192ページ 3,800円＋税

分子細胞生物学を生命系の学部1,2年生を対象に教える際に、教科書の選定に悩んだ教員の方も多いのではないだろうか？ また、最新の細胞生物学を自分で学んでみたいと思った時に、参考書選びに迷った経験のある学生さんも意外と多いのではないだろうか？ 分子細胞生物学の教科書の定番と言えば、言わずと知れた海外著書の「細胞の分子生物学（ニュートンプレス）」や「分子細胞生物学（東京化学同人）」の訳本であろう。両書とも、かなり頻繁に改訂が行われており、最近の知見を含め非常に良くまとめられている。しかしその一方で、これらの著書は辞書のような分厚さがあり、とても授業の度に持ち歩くレベルのものとは言い難い。加えて、値段も制限酵素並の価格で、将来分子細胞生物学を専門分野としない学生さんにはとても手を出しにくい存在である。実際、私も以前これらの海外著書を教科書に選定したことがあるが、多くの学生さんは図書館の本で用を足していたようである（実は筆者も学生の頃は図書館派でした……）。分厚い教科書ではなくコンパクトで持ち運び可能、それでいて分子細胞生物学を体系的かつ詳しく学べる教科書を手元に置きたい、そんなニーズに答えてくれるのが正に本書ではないだろうか。

本書は14年ほど前に発行された初版本の改訂版（第2版）で、この10年間に目覚しく発展してきた細胞生物学の新知見を含めながら、改訂版では学生さんの理解の向上のための工夫が凝らされている。まずは何と言っても、各章のはじめに学習のポイントが要約されるようになった点である。加えて、各項目の重要語句が青色のゴシック体で強調されるようになった点も、学生さんの理解の一助となるであろう（実は、改訂版では二色刷にグレードアップ！）。

もちろん、改訂版でも初版の優れた点は継承されており、例えば、どの章でも図表がふんだんに用いられており（B5判にもかかわらず、その数実に1ページに1枚以上！）、言葉だけでは理解しにくい生命現象を理解するための視覚的なサポートとなっている。また、歴史的に重要な実験結果、発見、生命現象をトピックスとして取り上げ、本書の内容をより深めている。さらに、全ての重要語句や専門用語はカッコ書きで英語でも表記されており、将来英語の学術論文を読む際にも大いに役立つと考えられる。

今回の改訂版と初版の目次を比べてみると、実は意外なことに第2版で追加されている大項目は「2.6 タンパク質機能解析法」のみである。これはまえがきにも記されているように、第2版ではRNA干渉法やCRISPR/Cas9によるゲノム編集テクニックなど最近の知識を盛り込みながらも、著者のこだわりで教科書としてのページ数の増加を意図的に抑えたためである。それでは内容が薄くなってしまふと心配になるかもしれないが、実際に読み進めるとそのような心配は杞憂であり、むしろ本書の内容の広さ・深さには驚かされる。したがって、本書を手元に置いておけば、見知らぬ生命現象やタンパク質の機能などを調べたい時にも大いに役立つと考えられ、ちょっとした辞書代わりの役割も果たしてくれるものと期待される。

最後に、本書は上述してきたように初版に比べ内容的にもパワーアップしているにもかかわらず、初版にはない二段組みの書式を採用することで全体のページ数はむしろ圧縮され、かなりコンパクトな仕上がりになっている。このため価格は以前より400円も安くなっており、これから分子細胞生物学を学ぶ皆さんに二重にやさしい一冊である。

（福田光則 東北大学大学院生命科学研究所）